

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

栗栖ティナ
表紙／火曜

番外編

俺のフラグは よりどりみでレ

恋の闘争は砂浜で



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『俺のフラグはよりどりみデレ番外編 恋の闘争は砂浜で 前編』
『俺のフラグはよりどりみデレ番外編 恋の闘争は砂浜で 後編』
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『俺のフラグはよりどりみデレ1～3』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



俺のフタゴはテレ
よりどりみみテレ
恋の闘争は砂浜で

番外編

栗栖ティナ

表紙／火曜

登場人物紹介

Characters

ひびき み お
響 美緒

遼人の幼馴染みの活発な少女。通称「デレのないツンデレ」で、照れ隠しで素直な態度を取れない。

さくらこうじ し おん
桜小路詩音

転校初日に遼人が出逢った美少女。遼人に一目ぼれして、おしかけ女房のように振る舞う。時には嫉妬でヤンでしまうことも。

すずむら さ さ ら
涼邑 紗々羅

遼人の妹。度を越えたブラコンで、兄である遼人のことを異性として好いている。

すずむら りょう と
涼邑 遼人

知らず知らずフラグを立ててしまう体質の持ち主で、「主人公」として女の子だらけの学園に通っている。

「は、早くしなさい！　いつまで待たせるつもりなのよ、バカ遼人！」

「いや、そう言われても……」

（いつものことだけど、どうしてこうなるんだよ！）

急かしてくる金髪ツインテールの幼馴染み——響美緒に力なく答えながら、涼邑遼人はまた巻き込まれてしまった現実^{リアル}じゃない状況に戸惑い、天を仰ぐしかなかった。

道を歩けば、敵に追われる美少女と正面衝突。

転校先では、知り合った美少女達となし崩し的に肌を重ねるといいう美味しいイベントが、立て続けに発生。

まるで物語の主人公のように現実離れした出来事が日常茶飯事で、『フラグメイカー』と呼ばれる少年の資質が、今日もまた遺憾なく発揮されていた。

（この光景……まさに夏のバカンスって感じだよな。CMに使われそうな）

雲ひとつない青空の下、燃えるような激しさで輝く太陽に照らされる白い砂浜。

その片隅に。パラソルを張り、セクシーな水着姿の女の子と寄り添って、静かな波音をBGMに愛を語らう。

理想的すぎて、逆に現実離れしてしまっているシチュエーションだ。

「こら、ポーっとするな！　ううっ、か、勘違いはしないで！　さっさとオイルを塗ってもらわないと、日焼けしちゃうそうだから、急かしてるだけ!!　別に、遼人に早く触って

欲しいとか、全然思っていないんだからね！」

パラソルが作る日陰の下、焼ける砂に敷いたシートに仰向けで横たわる美緒が、顔を伏せたまま、少し子供っぽさの残る黄色い声で叫ぶ。

肩越しに見える頬が赤く染まって見えるのは、強い陽射しのせいか、それともまったく別の理由か。

（本当、現実じゃない……）

心の中で口癖を呟きながら、遼人は横たわる幼馴染みから手渡されたサンオイルを片手に——ビキニブラの紐が外されて惜しげもなく晒された真っ白な背中を眺め、ここに至るまでの一部始終を、改めて振り返るのだった。

「うわあ……変わってないなあ」

今、住んでいる聖エスタド学園の寮から、電車とバスを乗り継いで二時間ちよつと。

白い波飛沫が散る美しい砂浜を眺めながら、シンプルな短パン型の水着姿になった遼人が、しみじみと感嘆の声を漏らした。

そんなに遠くない場所に設備の整った別の砂浜がある上、岩場に囲まれて目立たないせいでもあるだろう。

夏真っ盛りの休日だというのに、人の気配はまったくない。まるでプライベートビーチ

のような状態だ。

「まだ、穴場のまま残ってくれてたんだな、この砂浜」

ここは先日まで遼人が暮らしていた実家から、子供の足でも自転車を使えばたどり着けるほどの距離。

まだ幼稚園くらい頃の頃、いつも自分にべったりなブラコン妹の紗々羅ささらや、近所の公園で出会った幼馴染みの少女達と一緒にサイクリングをしていた時に見つけた、思い出の場所でもあるのだ。

（美緒や詩音と会わなくなつてから、ここにも来なくなつたんだよな……）

懐かしさと寂しさを感じながら、とりあえず持つてきたパラソルとシートで適当な場所に休憩場所を作り、しばし腰を休める。

「何にしても、ここならゆっくり泳げそうだよな」

「ちよつと遼人、何をぼんやりしてるのよ！ また、余計なことを考えてるんじゃないでしょうね？」

「へっ？」

不意に横から聞こえてきた声に振り返ると、陽射しを受けて輝く金髪のツインテールを揺らしながら、熱く焼けた砂の上をこちらに駆け寄ってくる少女の姿が視界に飛び込んできた。

「やめなさいよね！ あんたがあれこれ考えると、それだけで変なフラグが立って、面倒なことになっちゃうんだから！ 禁止、絶対に禁止っ！！」

キンキンと耳に痛いくらい黄色い声を上げながら寄ってくるのは、響美緒。

この穴場の砂浜を一緒に見つけた幼馴染みの一人であり、昨夜、『泳ぎにいくわよ！』と唐突な誘いを投げかけてきて、半ば強引にここまで少年を引っ張ってきた張本人だ。

「あつ……そ、それ……あの……」

『別に変なことは考えていない』と言い返そうとした遼人だったが、すぐ傍らまで近づいてきた幼馴染みに見蕩れ、思わず言葉を失ってしまった。

「な、何よ……？ あたしの顔に何かついてるの？」

「いや、そういうわけじゃなくて……その……」

岩場の陰で着替えてきた美緒は、既に水着姿になっていた。

空に輝く太陽に似た、オレンジ色のビキニ。

雪のように白い肌に映える色合いの布地は小さく、型良い美乳の上側は収まり切らずにこぼれ落ちてしまっている。

ショーツの方もローレグ状態。ここまで走ってくるだけで少しずり落ちてしまったのか、恥丘やプルプルと張りのある桃尻の割れ目の端が今にも見えてしまいうそう。

活動的な彼女のことだ。泳ぎやすさを重視した、競泳水着風のものを用意しているので

はないかと勝手に想像していたのだが、完璧に裏切られてしまった。

「ちよつと、遼人！ そんなにジロジロ見て……も、文句でもあるわけ!!」

「へっ？ いや、文句なんて別に……」

「うるさい、うるさあいつ!! 詩音や翠さんみどりみたいなのに、もつとグラマラスじゃないとビ

キニは似合わないとか、そんな失礼なことを考えてる！ 絶対にそう!!」

「違うって！ その……凄く似合ってるから、見蕩れちゃってたんだけ」

いつものように、ツンツンと怒りをあらわに迫ってきた幼馴染みに気圧されるまま、遼人は思わず素直な気持ちを漏らしてしまった。

「ふにやっ！ み、み、み、見蕩れて……?」

それを聞いた瞬間、今にも嘔みついてきそうな勢いだった美緒が、まるで凍りついてしまったかのように硬直してしまった。

白い頬が火をつけられたかのように赤々と染まり、今にも頭から湯気が上がってしまっている状態。

大きく見開かれたクリッと丸っこい瞳が落ち着きなく左右に揺れ、普段は強気に結ばれている小さな唇は綻び、小刻みに痙攣を繰り返している。

「あの……美緒、大丈夫か?」

「……にやっつ!! だ、だ、大丈夫よ！ 問題ない!!」

「いや、でも、何か顔が凄く真っ赤だし……まさか、もう熱射病に？」

「ち、ち、違うわよ！ あんたのせいでしょう、このエロ遼人！ い、いきなり見蕩れてるとか……そんな……反則！ 恥ずかしい台詞、禁止!!」

「そ、そんなに怒らなくても……」

（というか、あそこで似合っていないとか言ったら言ってたで、『失礼だ!』って、怒ってたんだろうなあ）

キンキンと耳に響くような声で怒鳴りつけてくる幼馴染みを宥めつつ、心の中でそんなことを呟いて苦笑する。

「何よ、遼人！ ニ、ニヤニヤして……か、勘違いしないでよ!! あたしは別に、いきなり褒められたのが嬉しくて動転してるとか、そういうわけじゃないんだからね!」

「はいはい、わかってるって。ほら、それよりパラソルの中に入れば？ そこだと、日焼けしちゃうぜ」

短気な上にシャイで、なかなか気持ち素直に出せない。

乙女の破片の影響で、誰もが認める典型的な『ツンデレ』属性になってしまっている少女の反応にも、再会してからの数ヶ月で大分慣れてきたものだ。

遼人はツンツンと怒鳴り続ける美緒を適当にあやしなから、パラソルの日陰へ誘ってやつた。

「ほ、本当に違うんだから！ この水着だって、遼人を誘惑する為に、ちょっと冒険して大胆なのを選んだわけでもない……絶対にもうじゃないんだからね」

まだブツブツと言いつけがましく呟きながらも、金髪ツインテールの少女は抵抗することもなく、誘われたとおりパラソルの下に入り、少年の隣に腰を下ろす。

「もう、普段鈍感なくせに、こういう時だけ……卑怯！」

「ひ、卑怯って……」

「それとも、何？ こういう時にはしつかりムードを作っちゃうのも、『主人公』の資質ってことなのかしら？」

「ムードって……うっ、別に、そんなつもりはないって！」

体育座りになって火照る顔を自らの白い膝に埋め、チラチラとこちらを眺めて問いかけてくる幼馴染みに、遼人は慌てて波の穏やかな海の方を見つめて話題を変える。

「久し振りにきたけど、本当、いい場所だよなあ、ここ。せっかくだし、他のみんなも誘ってくればよかったんじゃないか？」

ここを一緒に見つけたもう一人の幼馴染みや、妹。日頃、何かと一緒に行動することの多い、何かと賑やかな寮の仲間達のことを思い浮かべながら呟く。

「いいじゃない、たまには！ みんなで来たら、またドタバタしてゆつくり泳げないに決まってる。せっかく穴場の砂浜にきたのに……そんなの、台無し!!」

「それは……うん、まあ……」

ちよつとムキになつて言つてくる美緒に気圧され、遼人はおずおずと頷き返す。

『乙女の破片』という、不思議な能力と極端な性格を与えてくれるモノを持つ仲間達が、揃いも揃つてトラブルメイカー気質であることは事実だ。

特に、この金髪の幼馴染みを妙に敵視している黒髪の幼馴染みがいたなら、五分も持たずに激しい戦い——『乙女の破片』を持つ少女達が、その身に宿つた力を惜しげもなくぶつけ合う『鬭争』^{ロツダ}が始まるのは目に見えている。

だから、美緒の心配は理解できなくはないのだが……。

(隠そうとすると、逆に何か起こりそうな気もするんだけどなあ……)

自分がそう考えてしまうことが、そもそもフラグを立てることになりかねない。

ハッと気づき、慌てて頭の中を切り替えようとした直後だった。

「……別に、最近、しーちゃんや妹ちゃんにリードされてる感じがして、ちよつと焦つて勝負に出たとか、そういうことじゃないんだから……」

「え、えつと……」

「……遼人は、あたしと二人つきりじゃ不満なの？」

美緒は膝に顔を埋めたまま、上目遣いで少年を見つめて問いかけてくる。

瞳は不安げに潤み、普段の強気な雰囲気や嘘のような儂い雰囲気を醸し出す。

「いや、そ、そんなことはないって!! ……うん、まあ、たまには二人もいいよな」

普段とのギャップが不思議な可愛らしさを感じさせてくれ、遼人は異様な鼓動の高鳴りを感じつつ、誤魔化すように少し早口で答える。

「そ、そうよね。こうして二人つきりも悪くない……というか、この方が……」

いつものハキハキとした物言いが嘘のように言葉を濁し、嬉しそうに頬を緩める金髪ツインテールの少女。

その姿を横目で眺めているだけで、遼人は思わず生唾を飲んでしまうほどの興奮を抑え切れなくなってきた。しまった。

（おかしいぞ、今日の美緒。何でこんなに可愛らしく……せ、絶対に現実じゃない!）
普段の暴力的な雰囲気や嘘のように、しおらしく愛らしい姿。

砂浜と大胆な水着というシチュエーションが、そう感じさせてくれるのだろうか。考えれば考えるほど意識してしまい、目が離せなくなる。

「べ、別に……見たいなら、好きに見ていいわよ。遼人なら……」

「うっ、あつ、い、いや! 別に水着を盗み見てたとかじゃなくて、その!」

「は、恥ずかしいけど……でも、今はそんなこと言ってられないもん。しーちゃんや他の子の邪魔が入らないチャンス、滅多にないし……」

自分自身へ言い聞かせるように呟きながら、体育座りの幼馴染みが少しずつ少年の方に

にじり寄ってきた。

暑さのせいか、それとも羞恥のせいか。ほのかに色づいたふとももや二の腕が、今にも触れてしまいそうな至近距離。

かんきつ類に似た爽やかな香りが漂ってきて、遼人は半ば無意識の内にゴクリと咽喉を鳴らしてしまった。

（や、やばい、この雰囲気！ ダメだ……ちよつと頭を冷やさないと!!）

このままで居たら、何かおかしなことになりそうだ。

とにかく空気を変えたい一心で、遼人は腰を浮かせながら横の幼馴染みを促す。

「あのさ、せっかくだから早く泳ごうぜ！ 暑いし、少し頭……だけじゃなくて、身体を冷やさないと！」

冷たい海の水に浸かれば、こののぼせた頭も落ち着くだろう。

そう思い、パラソルの下から駆け出そうとした少年の手を――。

「ま、待って！」

ガシツと力強く、金髪の少女の手が握り締めた。

「その前に……ちよつとお願いがあるの。……いいでしょ？」

茹ったように真っ赤な顔で問いかけてきた美緒は、空いた片手で傍らに置いたバッグを探り、取り出した小瓶を少年の方へ突きつけてきた。

「これ……塗って。サンオイル……」

「へっ？ 塗れって……いや、ちよ……あ、あの……」

渡された瓶を手に慌てふためく少年に構わず、意を決するように深呼吸をした美緒は、自らビキニブラの結び紐を解き、シートへ仰向けに横たわってしまった――。

「……ちゃんと、手で温めてから塗ってよ」

「ああ、その……う、うん」

組んだ腕におでこを乗せ、顔をしっかりとシートに埋めたまま急かす幼馴染みに答えながら、手にしたボトルに入ったオイルを右手にたっぷりと取る。

（いいのかな。塗るって……その、さ、触るってことだろ？）

健康的な眩しい白肌を見下ろしながら、思わず生唾を飲みそうになるのを堪える。

元々露出が多い水着だったのに、今はビキニブラがほどかれ、シートと身体の間挟まれているだけの状態。

楕円に潰れた美乳の横がわずかにはみ出ている、見てはいけないとわかっているにもかかわらず吸い寄せられてしまう。

「ほら……いつでもいいわよ、遼人」

「わ、わかったよ！」

（落ち着け。これはサンオイルを塗るだけ……それ以上、深い意味はないんだ！）

言い訳がましく心の中で叫びながら覚悟を決めた少年は、自らの両手を何度か擦り合わせてオイルを温めた後、まずは華奢な肩を揉むように掴んだ。

「はっ……んう……」

「うっ、まだ冷たかったか？」

「ううん、平気。そ、そのまま……続けていいわよ」

（平気……って言うわりには、顔がさつきより赤くなってるよな、美緒）

自分から視線を外すようにそっぽを向くその顔は、鮮やかな桃色に上気してしまっている。

小さな唇から熱い吐息がこぼれる度、ビキニブラから解放された隆起が小さく上下し、はみ出る横乳がその強い弾力を訴えるようにプルプルと揺れていた。

（オイルを塗ってるだけ……それだけ……）

呪文のように頭の中で繰り返しながら、遼人は肩から二の腕の方へ手の平を滑らせて、温めたサンオイルを塗り伸ばしていく。

（やっぱり柔らかいよな、女の子の身体って）

手の平にしつとりと吸いついてくる、肌理細やかな白肌。触れているこっちもムズムズとくすぐったく、何とも言えない心地よさを感じてしまう。

「ふあっ、にやう……んあっ、はあはあ……」

「あ、あの、美緒、何か息が荒くなってるないか？」

「気のせい！ ちょっとうつ伏せになってるのが、息苦しいだけ」

「いや、明らかにそれだけじゃないよな……」

「う、うるさい!! いいから、早くして！ ほら、そんなに恐る恐るじゃなくて、もっと大胆に……腕以外のところにも。日焼けしたら、後が大変なんだから!!」

「は、はい！」

キンキンとヒステリックな声に気圧され、遼人は反射的に背を伸ばして頷き返す。

この金髪ツインテールの幼馴染みに強く言われると、どうしても逆らうことができない。幼い頃、いじめっこといじめられっこだった関係が、今も尾を引いているのだろうか。

(とにかく、こうなったらさっさと済ませるしかないよな)

遼人はそう決断すると、蓋を開けたままにしてあるボトルから新しいオイルを手に取り、横たわる幼馴染みの身体へ満遍なく塗りたくっていく。

まずは首筋。そして背中からわき腹の辺り。ローレグのショーツに包まれている部分は飛ばして、ほっそりと引き締まったふとももやふくらはぎ、そして薄い色のマニキュアで飾られた足の指先まで。

「くんっ、はふっ、ンウツ……あふっ……」

(ふともも、細いのに凄く柔らかい……わき腹やふくらはぎは、引き締まって……)

波音に混ざって聞こえる甘い声をBGMに、部分部分違う感触を手の平全体で味わいながら、甘いココナッツの匂いがするオイルを塗りたくっていく。

じっくりと触っていたら気持ちを抑え切れなくなるのはわかりきっているので、埃を払うかのようにササツと撫で、できるだけ接触の時間を短くするように努める。

「あの、とりあえず一通り塗ったけど……?」

「これでおしまい? んっ……何だか、凄くいい加減! もうちよつと、丁寧に塗ってくられてもいいでしょ? まだらに焼けたら、みつともないじゃない」

「で、でも、丁寧にって言われても……」

「何よ、別に遠慮したり、照れたりすることないじゃない! 小さい頃は、一緒にお風呂にだつて入ってた仲だし! それに……その……も、もつと凄くことだつて……しちやつてるでしょ?」

「しちやつてる……つて……っ?! あうっ、そ、それは、まあ……」

顔を背けたまま、照れ隠しの早口で怒鳴りつけてくる幼馴染みの言葉で、少年の鼓動はますます高鳴ってきてしまう。

美緒が指摘したとおり、彼女とは既に何度か肌を重ねた経験がある。

だが、それは恋人同士だからというわけではなく、必要に迫られてのこと。

それ故に、意識すると禁忌の思いが更に強くなり、オイル塗れになった身体を見下ろす

ことにもためらいを感じてしまう。

「遼人……そんなにあたしの身体に触るの、嫌なの？ ……しーちゃんみたいに、セクシ
ーじゃないから……」

「そ、そういうことじゃないって！ 嫌じゃないから、困ってるわけで……って、ああ、
もう、塗ればいいんだろう！ 塗れば!!」

口を開くと墓穴を掘りそうだと悟った少年は、半ばやけくそ気味に叫ぶや否や、再びオ
イル塗れの手の平を幼馴染みの背中に伸ばしていく。

（余計なことは考えるなよ、俺！ ただ、オイルを塗ればいいだけ……変なところに触ら
ないように気をつけていれば、問題ない!!）

そう心の中で叫んだ直後、ハッと気づく。

（ダ、ダメだ！ 俺がこんなこと考えると、逆になんかフラグが立ちそうな——）

——ツルンッ！ むにゆうっ……。

「にやうっ!? んんうっ、ふえっ、ああっ、な……んんっ！」

「なっ、うっ、うわあっ!？」

少年の胸に、そんな嫌な予感が広がった直後。たつぷりと塗りすぎたオイルのせいで手
の平が思い切り滑ってしまった。

滑らかな背中に沿って下の方へずれていった手は、ローレグショーツの端から中へ入り

込み、その小さな桃尻を驚掴みする形になってしまう。

（俺、お、お、お尻を掴んじゃってる？ やばっ、どうしてこうなるんだよ!!）

片手で半分ほどを包み込めてしまう可愛らしい尻房は、他の部分とはまた違う、瑞々しい張りを感じさせてくれる。

離さなければいけないとわかっているが、それでも指に伝わってくるその感触がクセになり、まるで張りついてしまったように手の平が動かせない。

「りよ、遼人お〜！ あんた……んあっ、いきなり……」

「ごめん！ わざとじゃなくて、あの……お、落ち着いて！」

下手に刺激すると、強烈なお仕置きが待っている。

拳や蹴りならまだしも、彼女が乙女の破片によって与えられた炎を操る能力で、こんがりと丸焼きにされる可能性も否定できない。

恐怖に肩をすくませながら、必死に許しと情けを乞う間に……厳しくつり上がっていた少女の丸っこい瞳が、妙に艶やかな光と共に細められてしまった。

「まあ、いいわ。……続けて。か、身体中……全部、塗って欲しいから」

「全部って、ど、どういうこと？」

「わ、わかるでしょ!! そ、そこ……お尻も……後、前の方も。この水着、小さいから……そういうところも注意しないと、焼けちゃうかもしれないし」

顔を上げて戸惑う遼人を見つめる美緒が、とってつけたような理由をモゴモゴと付け足しながら促してくる。

「前って……」

そこで言葉を止めた遼人がはみ出す横乳へ視線を向けると、それを察したように美緒がコクリと小さく頷く。

お尻も乳房も……もつと秘密の部分まで。彼女の言う全部がそういうことだと理解した遼人は、酸欠状態の金魚のように口をパクパクとさせながら、大きく首を横に振る。

「そんな、無茶言うなって！」

「いいでしょ！　べ、別に触るの初めてじゃないんだし！」

「だからって、こんな場所……」

「問題ない！　だ、誰も居ないんだし……それとも、そんなに触りたくないの!？」

「そうは言っていないけど……」

「じゃあ、素直に言うことを聞きなさいよ、エロ遼人!!　しーちゃんや妹ちゃんに迫られた時は、あっさりど流されるくせに！　あたしの時だけ抵抗するとか、生意気！」

「そ、それは……ちよ、ま……うわっ!？」

ツンツンと激昂しながら飛び起きた美緒が、まるでタツクルのような勢いで少年の身体に飛びついてきた。

不意打ちだった上、シートにも垂れてしまっていたオイルのせいでお尻が滑り、そのままステンと絵に描いたように倒れてしまう。

「いつつ……な、何をするんだよ！」

——むにゅうっ……。

そんな問いかけに対して声より先に返ってきたのは、胸板の辺りに押しつけられた、健康的で瑞々しい弾力感だった。

「なっ、み、み、美緒!? ちよ……」

「……何よ……」

事態が飲み込めずにうろたえる少年の上、まるで飼い主に甘える子猫のようにひよこんと覆いかぶさってきたツインテールの少女が、上目遣いで答えてくる。

首筋に顔を埋め、その形良い乳房をみぞおちの辺りに惜しげもなく押しつけてきている。置き去りにされたビキニブラが視界の端に見えることから察するに、肌と乳肌が直接密着しているのだろう。

汗でじつとりと湿ったそこは、吸いついてくるようなしつとりとした感触だ。

「どういうつもりだよ！ は、離れろって！」

「……嫌。というか、慌てすぎよ。別に、押し倒されるのは初めてじゃないでしょ？」

「そ、それは……」

緊張しているのか、少し震えた声で問いかけてくる幼馴染みに、遼人は否定できずに言葉詰まらせてしまう。

異様に積極的な女の子に囲まれているせいかな、こうして襲われた経験は片手の指の数では済まないくらいなのは事実。

だが、何度されても慣れることではないし、周囲の中でも照れ屋な部類に入る幼馴染みの大胆な行動に、驚きが隠せない。

（詩音ならわかるけど、美緒がこんな……絶対、現実じゃない！）

自分への想いを病的なまでストリートにぶつけてくる、もう一人の幼馴染みの姿を思い浮かべつつ、呆然と覆いかぶさるツンデレ少女を見つめていた刹那。

「こ、こうすれば……効率がいいでしょ？ 遼人もオイルを塗っておかないと、日焼けで肌が荒れちゃうだろうし……」

言い訳がましく呟いた美緒が、傍らに置かれていたサンオイルの小瓶を手に取るや否や、それを乳房が押し潰れる少年の胸板辺りへ大量に垂らしてきた。

「ひいつ!? ちよ、美緒！ つ、冷たい……んんっ！」

「はふつ、んつ、が、我慢しなさい、少しくらい。……すぐ、温かくなるんだから……んくつ、ふあつ、あひいつ、はあ……んくつ、ふあんっ！」

——ぬちゅつ、ぐちゅつ……にちゅつ。

砂を焼く陽光よりも熱い吐息を漏らしながら、美緒はその長い金髪ツインテールを揺らしながら、身体を前後にグラインドさせ始めた。

たつぷりと垂らされたオイルのおかげで、ツルツルとほとんど抵抗もなく重なる肌同士が擦れていく。

「まっ、待って美緒！ 何で、こんな……んあっ、ううっ！」

「う、うるさい！ ンッ……遼人が、ちゃんと塗ってくれないから！」

くすぐったさを堪えながら訴えるが、覆いかぶさるツインテールの幼馴染みは真つ赤な顔を背け、乱暴に言い返してくるだけ。その動きを止める気配はない。

「これなら……ひゃうっ、んあっ、はあっ、あ、あたしも遼人も一緒にオイルが塗れて、時間の節約になるでしょ！ だから……はひっ、にゃあ……んううっ！」

「時間の節約って……確かにオイルは塗れてるけどさあ。くうっ、ああっ?!」
(それよりも、色々擦れて、当たっちゃってるのが問題だっ！)

抗議の声も途中で上擦ってしまうくらい、お腹や胸板に当たる感触は甘く魅力的なものだった。

プニプニとゼリーのよう押し潰れた美乳の、見た目で想像していた以上の瑞々しい弾力感。肌を程よい強さで押され、オイルに塗れた乳肌が糊付けされたかのように強く密着してくる。



その全体的に柔らかい感触の中、時折、コリコリと硬いものが食い込んでくる。

(美緒……もう、ち、乳首が硬く……?)

滑る身体の動きに合わせて、大きく形を変える乳房の先端がチラチラと覗き見える。

雪のように真つ白な肌の中、そこだけが鮮やかな桜色に染まっている肉粒。その丸っこい突起は目に見えて硬く肥大していて、少年の肌に深く食い込んでいた。

「くんう、あふつ、はあつ、もつとお……し、しつかり塗らないと……んうつ、まだらになつちゃう……はひつ、にやふうつ、んつ！」

「いや、そんなに動くと……んあつ、はあつ、あふうつ、んんつ！」

「だって……ひんつ、はあつ、あふうつ……ヌルヌルして……ちよつと力を入れただけで、勝手に動いちやう……んくつ、ふあんつ、あひいつ、はふうつ！」

身体を大きく滑らせながら、ツンデレ幼馴染みは甘ったるい声を漏らす。

乳首の硬さや乳肌の火照りから察するに、この摩擦の刺激で昂ってきているのは間違いない。

少年を見つめる表情もうつとりと緩み始め、規則正しかった前後運動のリズムも次第に乱れてきていた。

「はあつ、くうつ、美緒、もう十分だろ！ そろそろ……んつ、うつ……」

どうにか止めようと訴えた直後、腰の辺りがまるでブラシのようなものに撫でられる感

触が伝わってきた。

しつとりと張りつく肌とも水着の少しざらついた布地とも違う刺激に、何事かとうつむき確かめた遼人は、その光景に言葉を失ってしまふ。

(み、水着……下もずれて……)

大きな動きにローレグのショーツが端から丸まり、ずり落ちてきてしまっていた。

元々覗き見えそうだった恥丘が半分以上露出し、そこに隠されていた薄い茂みが肌を撫でているのだ。

髪と同じ金色の柔毛がオイルに塗れて妖しく輝き、腰、そして水着の短パン越しに股間の辺りをサワサワとくすぐるように擦る。

「ちよ、やばいって、美緒！ そんな……んくっ、うあつ、ううっ！」

「はうっ、んっ、いいの！ 塗るう……もつと、しつかり……ふみあ……はひいつ、はあはあ……んくっ、んんっ、ああんっ！」

羞恥と行為の激しさにのぼせ、意識が蕩けかけているのだろう。

遼人の必死の訴えも甘えるような声であつさりと流され、全身を使ったオイル塗りは延々と続いていく。

「きゃうっ、んっ、はあつ、あふっ……ううっ、擦れて……ふみやあつ、んっ、はあつ、はんうっ！ イッ……くんっ、んんっ！」

「美緒、ほ、本当にやばいっ……もうっ、んっ、くああっ！」

声が甘く跳ね上がる度に胸や股間がグイグイと強く押しつけられ、その魅惑の部分との摩擦が強くなる。

もう目的がすり替わってしまっているとしたか思えない動きに、遼人も最早言葉を紡ぐこともできず、情けなく声を漏らすしかなかった。

（こ、こんな……もう、俺、我慢の限界だつて！ このままじゃ……）

そんな風に考えたことで、また余計なフラグが立つってしまったのだろう。

——ぬりゅうっ！

「ふえあつ!! にやあつ、んっ、あつ、熱いの……当たつて……」

「いつ、あつ、こ、これは、その……あつ……」

ツンデレ少女が下の方へ身体を滑らせた瞬間、少年の水着の端が引つかかって大きくずれ落ち、中に押し込まれていた屹立がピヨコンと音を立てて飛び出してしまった。

幼馴染みの柔らかく魅力的な肢体を、手の平、そして全身でたっぷりと味わわれ続けたのだ。

ばね仕掛けのような勢いで立ち上がったそこは、今にもはち切れてしまいそうなくらい硬く勃起してしまっていた。

（や、やばい!! これ、気づかれたら、美緒に何て言われるか……）

「オイルを塗っていただけなのに、どうしてこうなっている！」

『この色魔！ 変態!!』

散々罵倒された挙句、想像するも恐ろしいお仕置きをされる。そんな恐ろしい未来図が脳裏に浮かんだ――が。

「……凄い。もう、こんな……んっ、ああうっ、はあんっ……」

「へっ、あ、あの……美緒？」

「……ここにも、ちゃんと塗っておかないと……大事なところなのに、日焼けしたら大変でしょう？」

言い訳がましく呟きながら、美緒は自らの右手を足の間へ伸ばし、既にほとんど脱げかけていた水着の股布を横にずらしていた。

「い、いや、ここは水着で隠れるから……っ、あ、あの!? おい、待てよ！」

戸惑い首を傾げていた遼人は、不意に亀頭の高先へ押し当てられたねっとりと熱い感触に、思わず悲鳴のような声を上げた。

(ま、まさか……美緒……っ!?)

そんな嫌な予感が胸を過ぎった直後。

——ずりゅっ、ぬちゅっ……ずぶぶうっ!!

「あふうっ、んあっ、はあうっ、くりゅっ……んうっ、はひいっ！」

波音を掻き消すような大きく甘ったるい嬌声と共に、いきり立つ剛直が蕩けそうなくらい熱い感触——膣肉に包まれていった。

「はぐうっ!? ちよ……美緒、待て! 入ってる……入っちゃってるって!!」

血相を変えて叫んでいる間に、屹立は幾重にも重なって蠢く肉ヒダの間を掻き分け、窮屈な肉道の奥深くまで突き進んでいく。

張りつく膣壁は、肌を焼く陽光よりも更に熱く、竿の表皮が火傷してしまうのではないかと不安になってしまうほど。

壁全体が激しく波打っているだけでなく、表面の細かい皺も活発に震え、侵入してきたペニスを歓迎するように絡みついてきた。

「あふっ、はあ……んああ……は、入った……全部……んうっ、相変わらず、大きい……はひいっ、くふあっ、んんうっ……本当、む、昔と比べて成長しすぎ!」

「小さい頃と比べるなって! ……って、いや、そんなの今はどうでもいい!! それより、どういうつもりだよ! は、早く抜かないと……」

「何で、抜かないといけないのよ。オイル、ちゃんと塗らないと……はふっ、はあっ、や、焼けちゃうでしょう、ここお……んうっ、はふうっ!」

グチュツ、又チュリユツ、ズツプツ!

遼人の訴えを無視したツインテールの幼馴染みが、そのまま今までと同じように身体を

前後に滑らせ始めた。

張りのある乳房や頂点の突起、そして薄い恥毛に肌をくすぐられる感觸。

それに加え、ねつとりと柔らかい膣肉に剛直を扱きしゃぶられる刺激も加わり、遼人は耐え切れずに情けなく背筋を仰げ反らせてしまう。

「うあつ、オ、オイルを塗るつて……んあつ、はあつ、はぐつ……」

「ぬ、塗つてあげてるでしょ。ヌルヌルの……はふあつ、んくうつ、ひいつ……」

「ヌルヌルつて……ううつ、これ、オイルじゃなくて、美緒……んんつ」

「オ、オイル!! あたしのエッチなお汁じゃない……ふあふつ、りよ、遼人と二人つきりでドキドキして、さつきからずつと垂れてたとかじゃないんだからあ……」

こんな状況でも、いつもどおりに素直じゃない物言いです返してくる美緒が、少年の反論を封じようと云わんばかりに身体の動きを加速させてきた。

胸板の上で乳房が目まぐるしく形を変えながら擦れ、ギュツギュツと断続的に収縮する肉壺の中、ざらついた壁に竿肌が満遍なく扱かれる。

「はひつ、ふあああんつ! あふつ、はあつ、遼人のお……んうつ、はひつ、ひ、響いてくるう! 奥……し、子宮にズンッて当たる……はひつ、はんんつ!」

「うぐつ、はあつ、んん!! 美緒、や、やめ……んあつ、どうして、こんな……」

肉竿の芯を走る、痺れるような快感。それが腰にまで響いてきて、熱いものが根元にじ

わじわと込み上げてくる。

その切羽詰った状況の中、遼人は必死に齒を食い縛って射精の欲求を押しさえ込みながら、甘く身悶えるツインテールの少女へ訴えかけた。

（し、詩音じゃあるまいし……いつもツンツンしてる美緒が、こんな風に迫ってくるとか……絶対に現実じゃない!!）

誰かに、妙な薬でも盛られたのか。そんな疑念すら浮かんできた最中、長いツインテールを揺らしながら動く金髪の少女が、少し拗ねたような目で答えてきた。

「お、往生際が悪いわよ、バカ遼人お……いいでしよ、べ、別に初めてってわけじゃないんだから！ あたしの処女、奪ったくせに……」

「奪ったとか、人間が悪いこと言うなって！ あ、あれは……その……『代価』デインデイの為に、仕方なかったことだろう?!」

乙女の破片を持つ少女の助けを借り、現実ではありえないような能力を発動させる。

『主人公の力』。それを使った代価として、力を貸してくれた乙女と恋人同士のような甘いひと時を過ごさなければいけない。

その為に、この幼馴染みの純潔を奪ってしまったのは、紛れもない事実だ。

（まあ、そこまでしなくて……手を繋いだりする程度で十分だったんだけど、本当は）

後で判明したそんな事実を思い出し、何とも言えない複雑な気持ちを噛み締めていた少

年へ、頬を赤々と染めた幼馴染みが潤んだ瞳で続けて訴えてくる。

「……いいでしょ、い、一度くらい……代価とか関係なしでエッチしたって」

「へっ……え、えっと、それって……」

「しーちゃんとはそういうの関係なしで、色々やってるくせに!! ……ずるい……あたしだって、同じ幼馴染みで……それに……ううっ……バカ、鈍感っ! 女の敵!!」

照れ臭そうに視線を外し、半ばやけっぱちで怒鳴りつけてくるツンデレ幼馴染みの姿に、遼人は一瞬、言葉を失ってポカンとしてしまう。

(い、今の言葉って……えっと……その……)

確かに朴念仁と言われる方ではあるが、それでもここまで露骨な好意を見せられて気づかないほど、鈍感ではない。

「二人つきりでお出かけなんて、滅多にないんだし……こういう時くらい積極的にならないと負けちゃう……だ、だから、あたし……」

顔を横に向けたまま、今にも泣きそうな憂いの表情で呟き漏らす、美緒。

普段のツンツンと強気な姿が嘘のような、儂く愛らしい雰囲気、見守る遼人は胸の奥が熱くなるような昂りを感じてしまう。

(美緒は幼馴染みで、友達で……それに、俺には詩音が……でも……っ……ああ、もう! 立て続けの怒涛の展開と、パラソル越しでも茹るように熱い陽射しのせい、もうまと

もに思考することもできない。

ただ、こんな風に可愛らしく自分を求めてくれている女の子を無視できないという一心で、遼人は半ば無意識の内に腰を振り動かし始めた。

ニツチュウツ、ジユブブツ、ズリユウツ!

「にやふうつ!? くひつ、ふあつ、ひんつ、あああつ! りよ、りよと……んうつ、んにやあつ、何い……ひんつ、ひぐううつ!!」

思い切り腰を突き上げ、熱く絡みつく肉壺の奥へ、屹立を打ち込んでいく。

衝撃のあまり、覆いかぶさる少女の小柄な肢体そのものが滑り、唇が触れ合いそうな至近距離まで顔が近づいてくる。

「ふみゆつ、んあつ、はあはあ……こらあつ!! は、反則! いきなり動くなんて……んにやあつ、はあつ、にやうつ、んんつ!」

「だつて……くつ……そのまま言われたら、俺だつて我慢できない!」

「バカあ……エ、エロエロ遼人! そんな……んつ、はふつ、ううつ」

「オ、オイル……しつかり塗らないといけないんだらう? 手伝うから……だから……」

「い、いけない! あたし一人で、ちゃんと……んあつ、ひつ、むうつ!」

素直になれずに抗議してくる幼馴染みの唇を、自らの唇で隙間なくピッタリと塞ぐ。

キャンデイのように甘い香りと味わいを感じながら、腰を叩きつけるような激しい抽送

を続ける。

「むぐっ、ちゅっ、んあっ、にやあっ、はん！ りよお……と……んうっ、れるっ、はひ
いつ、はあっ、こんなあ……ふ、不意打ちばかり、ずるいい……んうっ！」

「先にしてきたのは、美緒だろ！ だから……んっ、ちゅっ、はむっ、んっ！」

文句を言いながらも、甘えるように莓色の舌を伸ばしてくる美緒に、自らも舌を伸ばして応える。

ピチャピチャと子猫がミルクを舐めるような音を響かせながら、トロリとした水飴のように甘い唾液を交換し、汗とサンオイルに塗れた身体を強く抱き締め、ガンガンと腰を振りまくる。

「はあっ、んっ、ちゅっ、美緒の中……どんどんヌルヌルに……んっ、ちゅっ」

「それ……はひっ、んうっ、りよ、遼人がいっぱい動くから、オイルが奥まで入ってるだけえっ!! 嬉しくて、い、いっぱい感じてるわけじゃない……んにやあっ、はふう！」

「どっちにしても、凄く熱くて……もう、な、中で蕩けそう……くううっ！」

サンオイルのココナッツのような濃厚な香りと、愛液のかんきつ類に似た爽やかな香り。混ざり合う二つの甘い匂いに包まれたままピストンを繰り返す遼人は、うねる肉壁との激しい摩擦によって、急速に射精の欲求が高まってきていた。

「出る……んっ、ちゅっ、はあっ、むうっ、んっ！ もう……くんっ、ううっ」

「ふあっ、はひいつ、いいわよ……んっ、塗って……んちゅっ、はあ、はひいつ、あたしのお腹の奥まで、ちゃ、ちゃんとしっかり塗ってくれないと許さない!!」

「塗るって、でも……んっ、んああっ……」

「いいのお……欲しい……はひっ、遼人のオイルう……赤ちゃんの素がたくさん入った、白いオイル……あ、あたしの子宮う……しきゅーにらしてえ……はひいつ、にやあっ、あんっ、イイツ……欲しい……欲しいよお……ふああっ、ふにやああっ!」

ニユリユウンツ、ズツプツ、ヌチュウツ!

一際大きな嬌声と共に、もう腰砕けになっていたツインテールの少女が、最後の力を振り絞って身体を下の方へ滑らせてきた。

丁度、遼人が腰を突き出すタイミングとピッタリ合い、蠢く肉壁と乱暴に擦れながら奥へ進む男根の先が、行き止まりの壁へ深く埋まってしまふ。

「うあ、で、出るっ!! やばっ、うあ、くうううっ!!」

ビュルルルルウツ、ドプウツ、ビュブツ、ドブブツ!!

「にやふああああつ!! きやあうっ、んっ、にやあああつ! イツ……くんっ、で、出てるうっ、お腹あ……あたしのお腹に、ビュルビュルくりゆうっ、んんーっ!」

金色のツインテールを振り乱し、背筋を大きく仰け反らせながら喘ぐ幼馴染みの胎内へ、逆る白濁が大量に流れ込んでいく。

亀頭で突き解した子宮口から、小さな肉室の奥を打ち叩くような勢いで吐き出される精液。

あつという間にそこを満たし、結合部からゴボリとこぼれてきてしまいが、それでも収縮を繰り返す膣道に促されるまま、長々と射精を続けていった。

「ふにゃあつ、はあつ、お、お腹、たぶたぶう……遼人のヌルヌルオイルで、あたしの子宮、たぶたぶう……にゃふつ、はあ……はひい……」

「美緒……んっ、ちゅっ、はむっ、んっ……はあはあ……」

射精直後の肉幹を、尚も執拗に締めつけてくる熱壺。

下半身全体が痺れてしまう恍惚の快感に酔いしれながら、遼人は意識朦朧とする美緒の顔を覗き込み、その甘い余韻を分かち合うように唇を重ねる。

（本当にしちやつたよ。代価とか関係なく、美緒と普通にエッチ……しかも、思いつきり中に出しちやつたし……）

求められたこととは言葉、果たして本当によかつたのか。

絶頂の波が引いていくのに合わせ、そんな思いがどんどん膨らんでくる。

（まだ、はつきり告白したわけでもないし、それに俺は……）

頭に浮かんでくるのは、運命的な再会を果たした、黒髪の幼馴染み。

彼女のことを思うと、何ともいえない罪悪感が込み上げてきてしまう。

(というか、バレたら……洒落にならないよな、これ)

そんな言い知れぬ不安を感じた直後だった。

「はふうつ、あ、頭……グルグルすりゆう……にやう……」

「へっ？ お、おい、美緒？」

覆いかぶさる幼馴染みが、力なく呟くや否や、自分の首筋へぐつたりと顔を埋めてきたのだ。

その身体は糸が切れた操り人形のように脱力していて、単純に甘えているだけというわけではなさそうだ。

「美緒、しっかりしろって！ おい、起きられるか？」

「む、無理……はふうつ、にやあ……熱くて、もお……はあはあ……」

「え……って、何か、凄く熱っぽいぞ!!」

抱き締めるオイルと汗に塗れた身体は、まるで火でもつけられたかのような、尋常ではない熱さ。

羞恥と快感で火照り色づいた肌や頬の色も、先ほどまでより明らかに濃くなっている。

「これ……まさか、熱射病になりかけてるのか？ お、おい、しっかりしろよ！」

いくらパラソルの下だったとはいえ、これだけの暑さの中、汗塗れになって激しく運動をしていたのだ。ある意味、必然の結果と言える。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>